樺太

我が故郷〝樺太〟

東京都　太田勝三

はじめに

かの大詩人、陶潜の名言に、「時に及んで当(まさ)に勉励すべし、歳月人を待たず……」というのがあるが、樺太(カラフト)で生まれ育った軍国少年も、古稀を迎えるようになった。昔は古来稀なることであったのだろうが、今や、平均年齢八十三歳を超え、高齢者という言葉の定義さえ変えざるを得ないようになり誠に喜ばしい限りではあるが、平和というぬるま湯にどっぷりと漬かってしまった現在になると、次々と世の中の様相はおかしくなり眉をひそめる事実が次々と起きて、「これでよいのか日本」と、声を大にして、叫びたくなるのも、古稀を迎えた我々の偽らざる気持ちでもある。

正しい歴史観を後世に引き継ぎ、本来の日本人としての魂をよみがえらせるには、百年、二百年と長い歳月がかかるであろう。しかし、その先駆けとなるのが、昭和一けた生まれの責任であることを肝に銘じ、「いつでも、どこでも、そして誰にでも」、日本人としての正しい心を、現在の人々に植えつけていかなければならないと思っている。その意味から、樺太についても、現代の人々からは「我関せず」との風潮で忘れ去られようとしているが、私は終戦前後の事実を書き残す

ことを、天から与えられた使命とも思っている。

一　幼少時代

私は、昭和七（一九三二）年に、樺太、大泊の船見神社の近くで、五男、三女の子だくさんの中の四男として生を受けた。

家庭では、今の時代と違って食事時、特に夕食は一家揃ってのだんらんの時であり、父母からいろいろな話を聞いていた。特にくどいように話していたことは「露助にはだまされるな！」という内容で、この言葉は忘れようにも忘れることができず、耳の奥底にこびりついている。露助などという言葉は、今では死語のようになっているが、支那人、半島人という言い方と共に、当時は当たり前の表現であった。相手もそれほど深く考えてはいなかったのではないだろうか。

二　小学生時代

幼少期を平穏無事に過ごした私は、昭和十五年四月に地元の公立船見尋常小学校に入学した。この小学校は、明治四十四（一九一一）年に私立の小学校として創設されたが、その後、大泊尋常高等小学校の分校になるなどの経緯を経て、公立小学校となった由緒のある学校であった。卒業するときは国民学校となっていた。

既に当時は、支那事変（日中戦争）の真っ最中で、二年生になった冬には、大東亜戦争が始まり、国家総動員令のもとに、「ぜいたくは敵、敵は鬼畜、米英」とか、「隣人はスパイと思え」とか、「一億総決起、打って一丸、火の玉となれ」などという、今では考えられないような標語のもとに、国を挙げての決戦態勢となり、小学生でも、軍国少年としての教育をたたき込まれたものである。

三　中学生時代

昭和十九年四月、樺太庁立大泊中学校に入学した。この中学校は明治四十五年、明治政府の勅令二号で四校創設された中等学校の一つ、「樺太庁中学校」で、伝統のある学校であった。大正十四（一九二五）年になると豊原中学校ができ、次い

で真岡、敷香、恵須取などにも中学校、高等女学校が開設された。話が横道にそれるが、戦時中は、木材、石炭などの軍需資源などの開発のために、樺太は急激に人口が増え、発展を遂げたために、塔路小学校などは学童数四千人近くという、マンモス小学校となった。昭和十七年以降にも次々と小学校が開校した。

中学入校時、既に戦局は急を告げていて、勉強どころか、勤労動員の毎日であった。低学年時は、出征兵士の留守宅の援農作業で、馬鈴薯掘り、燕麦刈りなどであった。それからは、松林の開墾、飛行場の建設作業、さらには大泊港で艀から食糧などを陸揚げする作業などであったが、学校の裏山での山火事消火作業にも出動した。

このころになると英語が禁止されて、野球では「ストライク」が「ようし」となり、「ボール」が「ダメッ」となった。郵便ポストは「郵便収受函」と呼ばれた。中学に入ってすぐには、一週間に一時限ぐらい、英語の授業があったと思うが、内容は皆目覚えていない。

学校の敷地は広く、家畜飼料の牧草も豊富で、飼育していた豚、牛、兎などの飼料はすべて賄っていた。

十一月三日の明治節には、既に雪に覆われている裏山を、全校生が六〜八尺ぐらいの棒で雪面を叩き、もろもろの歓声をあげながらの兎狩り行事があった。教練の時間には、模擬手榴弾投げ、三〇キロの土のう運搬競争などの体力検定。そしてスキー技能検定などがあって、思い出が深い。

特に、所属していたグライダー部では、運動場で文部省型初級機のC―一五〇を、強く太いゴム紐で部員一同が引っ張り、地上から四、五メートルほどの高さを飛んでいた。しかしこのグライダーも、練習中に大破してしまい、以後乗ることはなかった。予科練や、空にあこがれていた軍国少年の夢も、かなわぬものとなってしまった。

当時、大泊中学校の学級編成は、有名な部隊長や、軍艦などの名を冠し、一年は鈴谷隊、二年生

は富嶽隊、三年は三笠隊、四年は吉野隊、などと呼称していた。つまり私は、「樺太庁立大泊中学校富嶽隊小舘隊」の一員であった。担任教官は工作の先生で、試験では「表札」作りもあった。

中学とはいえ、書道、音楽、測量などもあったが、もとより修身もあり、幅広い人間教育が行われていて、現在の高校教育とは比べものにならない内容であった。

戦争の状況も、日一日と厳しさを増してきて、授業どころではなくなってきた。

「樺太を沖縄のようにしてなるものか」という気運がみなぎっていたが、広島、続いて長崎への原爆投下、そしてソ連の対日宣戦布告などで、ついに終戦の大聖断が下された。

私たちが終戦を知ったのは、確か八月十六日で、配属将校から伝えられたと思う。軍馬の飼料刈り作業で、学校からおおよそ八〇キロメートル以上も離れている落合（現在のドリンスク）近くに行っていた。誰一人として戦争に負けたなどと信ずるものはいなかったが、時間が経つにつれて、大声を出して泣く者、炊事場の大釜をひっくり返して床中に米粒をまき散らした者、さらには、軍が設営した宿舎である大テントを草刈り鎌で切りつける者など、みんなは憤懣（ふんまん）やるかたなき状態となってきた。「露助の謀略だ！」とか、「いや、やっぱり負けたのだ」とか、甲論乙駁（こうろんおつぱく）となり、果てには喧嘩となった者もいた。軍国少年を自負していた私も、その一人であった。

そのころ既に、敷香の北にある気屯（ケトン）、古屯（コトン）や、敷香、知取などからは、老若男女が限られた列車に鈴なりになって南下していた。機関車の煙突付近にぶら下がっている者もいたが、煙突の熱さを避けるために、煙突に布団を巻き、細引きで落ちないように体を結び、お互いに励まし合っている家族もいた。各車両の屋根にも同じような状態の人々がかじりついていた。

列車はこんな状態なので、我々中学生は、約百キロメートルぐらいあるところを行軍して戻るこ

とになった。必要最少限の荷物をリュックサックに詰め込んで歩き始めた。しばらく歩いていると伝令がきて、「次の列車に乗れることになった」と伝えられた。その指示によって我々富獄隊員の一部は、満載の石炭車に乗ることができた。残りの隊員は、後続の米俵を満載した列車に乗ったが、なぜ戦争に負けたのに物資を南下させるのかと疑問に思ったそうだ。学友は、共に落ちないように腕、手を組みながら、石炭の塊を一つ一つ捨てて、やっと座れる状態となった。

　そのとき、突然に列車が停止した。我々は一瞬緊張した。客車に乗っていた避難家族の中には、列車から飛び降りて草むらに逃げる者、「露助が来ているぞ！」と叫ぶ者などで混乱した。樺太の首都、豊原駅の手前でのことだった。そのうちに、何らの予告なしに列車は動きだした。小用を足しに降りた人、停車時に飛び降りた人たちなどがどうなったか、私には分からない。相当な時間をかけて列車は豊原駅に着いたが、ホームは大勢の人々で混乱状態になっていた。

　満員状態の列車に、これ以上は乗り込めないと分かっていても、防空頭巾にモンペ姿の母親が、背中に二、三歳ぐらいの子供を背負い、胸の前には赤ん坊をくくりつけて、両手には荷物を持った姿で、乗り込もうとしていた。そのため我々は石炭車の上に立ち上がり、落ちないように手を組み交わしていた。徐々に貨車は豊原駅から動きだしたが、最後に乗せられたのはお巡りさんの家族三人だった。

　そのお巡りさんは、家族がどうにか貨車に乗れたのを見届けてから、「頑張るんだぞ！　本官は仕事があるから」と言って、右手で刀を高く上げていた。夫婦、親子別れ別れになることや、どうにか避難列車に乗せることができた安心感からか、お互いに名前を呼び合い、涙を流しながらの別れであった。

　当時、樺太にいた警察官は、ソ連軍によって全員逮捕され、銃殺された人も多かった。さらには

シベリア送りにされて、厳寒の中、乏しい衣食住でありながら、強制労働を強いられた人も多数であった。我が学校の横山賢市校長もその一人である。思えば痛恨の極みである。

やっとのことで、南渓町駅に着いた。

四　緊急脱出

南渓駅に着いたのは、八月十七日、終戦二日後の夜であった。我が子を迎えに駅に集まった父兄らは、それぞれの名前を呼び合っていた。解散時には教官から指示があった。それは、

・決して、単独行動はとるな。

・できるだけ早く家に帰れ。

・明日は必ず学校に来て再会するのだ。

などであった。

私は友だちと一緒に、真っ暗な海岸通りを小走りに家に向かっていた。その途中で、不意に「太田はおらんか！　しょっぺい、しょっぺいはおらんか！」という、聞き覚えのある甲高い声がした。父は、銃剣術の選手として幾度も賞をもらっているが、その気合いのこもった声である。また、どうしてなのか、父からは、「しょっぺい」と呼ばれていたし、母や父の同僚からは、「しょっちゃん」と呼ばれていたので、その声は父であることがすぐに分かった。友だちからも、「太田君のことではないかい？」と言われたので、すぐにその声のする方に近づいて行った。やはり父だった。

すると父はすぐに、一片のメモ紙を私のポケットに捩じ込みながら、「早くあの船に乗れ、母さんたちがいる。頼むぞ！」と、まるで拉致するが如くに、私の手を握った。「父さんは、まだすることがある！」などと言い残して、暗闇の中を足早に去って行った。

しかし、呆然として父の後ろ姿を見ていた私に、父も私の姿を気にしていたのか、再び「早く行かんか！」と、語気を荒くして言った。これが、元気な姿で会った父との最後であった。

大泊港の岸壁は、緊急脱出の人たちで溢れるば

かりで、父の勤めていた会社の汽船はまさに出航寸前であった。見覚えのある顔の父の同僚の人が、父に頼まれていたのであろうか、「しょっちゃんでないかい。太田君こっちだ、こっちだ……」と、大声を出しながら、手招きしてくれた。船のクレーンを下ろして、もっこのようなものに乗って、吊り上げられて乗船した。

船に乗り、ほっとして岸壁の方を見ると、まだ岸壁では順番を待っている人が大勢いた。なぜか、後ろ髪を引かれるような思いであった。

乗船はしたが、船内はそれこそ足の踏み場もないくらいの混みようで、母や、姉妹と会えたのは、稚内近くになってからである。稚内港では、相当数の船が着岸待ちをしていて、上陸できるまでにずいぶんと時間がかかった。稚内港からは、長い距離を歩かされて、稚内駅に着いた。稚内の市内は、爆撃と艦砲射撃によって手痛い被害を受けていて、その惨状を目の当りに見た私は、爆撃も、艦砲射撃もなかった樺太からは想像もできないことだった。

稚内駅には、無蓋貨車を十両ばかり連結した列車が停車していて、樺太からの緊急脱出者の集団が乗ることになったが、母の、「真ん中へ、真ん中へ！」という言葉に従って、五、六両目の貨車に乗った。稚内駅は出発したものの、ときどき、駅と駅の中間で、随分と長い時間停車した。樺太で経験したと同様に、いつ発車するのか分からずに、大小の処理のため、女、子供は難儀をしていた。

時折、駅に着くと、国防婦人会や、在郷軍人会の人々が、澱粉でこねた団子や、小さなおにぎりなどを配ってくれたが、人数の多い脱出者全部に行き渡る状態ではなかった。

乳飲み子を抱えた若い母親が、「お湯を下さい！　一杯でいいですから、熱いお湯を下さい」と、半狂乱のようになって叫んでいたが、真夏のこともあって、与えられるのは水だけだった。子育ての経験豊富な母は、その水を体温で温めるよ

うに教えていたが、ミルクを溶かすまでに温かくはならず、赤ん坊は泣き叫ぶし、母親はおろおろするばかりであった。後年、母は、「あの赤ちゃんはどうしているかね？」と、よく口癖のように言っていた。

列車が札幌駅に着くや、母は姉と共に携行していた米や鍋を持ってホームに降りた。私には、「妹から目を離すでないよ！」と言っていった。私は妹とじっとして待っていたが、母たちはなかなか戻って来ない。そのうちに発車合図のベルが鳴り、列車は動きだした。母と姉のことが気懸かりで、おろおろしていたが、一緒に乗っている人たちが、かわいい顔をしていた妹に向かって、「幾つになったの？　何という名前なの？」などと聞いてくれて、妹の気は紛らわされていたが、「お母さんは……」と言われると、途端に大粒の涙を流して、私にしがみついてきた。私も随分と困ってしまった。その人たちは、「兄(あん)ちゃん、どこに帰るの？」と、私に話しかけてきたが、母と一緒の脱出行なので、その母がいないと返答のしようがなかった。するとその人たちは、「みんなで力を合わせて頑張ろうね！」と言って眠りだした。

函館駅に着き、これまた相当の距離を歩いて、やっとの思いで青函連絡船の岸壁に着いた。ここでも乗船者が溢れるほど列を作っていた。私は、あと何十人ぐらい乗れるのかと思いながら、列の後ろに並び順番を待っていた。するとそこに、母と姉が私たちを探し求めながら待っていた。数分遅れていたならば、その船には乗れなかったし、母と姉に会うこともできなかったかもしれない。

母の話では、札幌駅では駅長室に一番早く駆け込んで、ご飯を炊き、五分ぐらいの半炊きのままで握っていたとのことで、「さあ！　食べなさい」と言って渡してくれたが、空腹であるのに胸がいっぱいになり、なぜか食べられなかった。妹は、そんなことにはお構いなく元気で、私の分までペロリと食べてしまった。その妹は、今でも大

阪で元気にしているが、時折会って、昔の思い出を話し合うが、樺太での生活や、脱出行のことなどは、全然覚えていないという。ただ、家の前の亜庭神社の池に落ちたことは記憶にあるという。

連絡船は満員で、乗船者の重みで沈むのではないかと思うほどであった。その船中での出来事で、今でも思い出すと目頭が熱くなり、胸が痛むことがあった。ふらふらになっている母親が、子供四人を荷物や、浮き袋と一緒に、次々と投げ込んだ悲劇である。

船内では、バケツリレーのようにして、塩だけで握ったおにぎりが手渡されたが、その作業の中に、鉢巻姿の姉の姿があった。姉も勤労動員に行っていたが、動員先から家に戻るやいなや、父から「すぐに母さんや、道子（妹）と一緒に港に行け」と、怒鳴られるようにして船に乗ったとのことだった。父は、姉を送ってから、私を迎えに南渓町駅に急いだものと思う。

青森港に着き、やっと親子が一緒になり、ほっとしたので、私は船でもらった握り飯を食べようとすると、母が、「しょっちゃん！　食べては駄目よ！」と言ったので、再びそれをポケットに入れた。母や、姉が食べた握り飯は、ねぐさかったとのことだった。

少し歩いて青森駅に行くと、ホームは穴だらけだった。市内も一面の焼け野原で、空襲のすさまじさを伺い知ることができた。ホームいっぱいの人混みの中を、助役らしい駅員が、行き先別に振り分けているようだったが、まったく聞き取れる状態でなかった。疲労困憊の母は、「もうしばらくここにいようよ」と言って、立ち上がろうとしなかった。見ると、残っているのは、私たちを含めた数家族となっていた。すると助役が、こうもり傘のような棒でホームの左右を払いながら、早く移動しろと言わんばかりに、執拗に迫っていた。この様子を、隣のホームで見ていた四十歳代の頑健そうな男が、ホームを飛び降りて私たちの方にやって来た。その男は、助役に対してものす

ごい剣幕で、「何するか、同じ日本人でないかい！　この野郎！」と言って、助役の胸ぐらをつかみ、喧嘩となった。言葉のなまりが、樺太の中学校で隣席に座っていた朝鮮人の学友の言葉と同じなので、朝鮮の人であることが分かった。

母は、自分たちのことからこのようなことになり、心配して、「止めて！　止めて！」と、手を合わせながら懇願して、喧嘩を収めた。そんなこともあって、助役の世話した列車に乗り込むことができた。

私たちは、わずかな荷物を細引きで落ちないように結び、さらにそれぞれの体をつないでいた。というのは、連結器の上に小板を置いていたためで、現在のように幌なども被っていないので、手摺りの間にも、ロープを幾重にも結んで転落防止を図り、立ったままでうとうとしていた。

この様子を車内から見ていた、樺太東海岸北部の知取から脱出してきた母親と娘、そしてその子供たちの七、八人の一家が、私の母に席を譲り合わせて座るように勧めてくれた。このときは本当に有り難かった。今の若者だったら座席を譲るなどという気持ちは、まったく持ち合わせていないだろう。戦前の教育では、極限状態になっても、他人の難儀は見捨てられないという温かい心を育てていた。

私は、富山の五百石駅辺りまでは元気だった四歳になる道子が、暑さと疲労のために弱ってきて歩けなくなったので、母の実家まで背負って行ったが、当の本人は全然覚えがないという。

五　富山時代のこと

やっとの思いで富山駅に着いたのは、確か八月二十三日の昼過ぎだった。樺太では想像もつかないような暑い日で、空には雲一つない晴天だった。駅舎もバラック建てで、そこから一望した市内は焼け野原となっていて、家一軒見当たらない。聞くと、八月一日の大空襲での惨状であった。終戦前の大本営発表は、「敵機襲来するも、我が方の被害軽微なり。敵は……」という決まり

文句の発表であったが、父はこれらの報道を信じ、「富山は大丈夫だから帰っておれ、また迎えに行くから」と、母に言っていたという。このような誤った報道のために、幾多の同胞の犠牲者が出たことも忘れてはならないことだ。

疲れから病身となった母が、市内の惨状を見て、「きゃー、何したのけー?」などと、富山弁丸出しで、駅員に詰め寄っていた。父が別れ際にポケットに捩じ込んだメモには、落ち着き先の住所が書いてあった。その稲荷町を訪ね歩いたが、皆目分からず、とうとう暑さと疲れのため、道端に座り込んでしまい、そのうちにうとうとと眠ってしまった。

白髪の老人が杖をついて向こうの方からやって来た。顔は父だったが、何か語りかけている。しかし、何を言っているのかは分からない。問い返そうとして目が覚めた。夢であった。目が覚めてすぐに夢のことを母に話そうとしたが、母と道子の姿はなく、姉は眠り込んでいた。

母は私をゆり起こそうとしたが、動かないので、てっきり病気になったものと思い込んで、駅まで引き返し、駅員に「薬！　薬！　気付け薬をください！」と言うなり、座り込んでしまったとのことだった。片言しかしゃべれない妹に連れられてきた駅員は、仁丹か六神丸かを二、三粒、姉の口に入れて頬を叩いて起こした。あの混乱期に、親切な扱いを受けた駅員には感謝の念でいっぱいである。

致し方なく母の実家である五百石駅に行った。五百石駅とは今の立山駅である。母、姉、私は待合室で眠ってしまった。妹だけが元気で、駅前に湧き出していた水を小さな手ですくい、私たちの顔にかけていたそうだ。

私たちの様子を見ていた駅員が、駅前の交番に届け出てくれた。お巡りさんは、母から事情を聞くや、母を背負い、実家が見えるところまで案内して、「本官は、別の仕事がある」と言って、足早に去って行った。その後ろ姿に、母は合掌しな

がら、「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏」と念仏を唱えて、座り込んでしまった。そのお巡りさんは、体格が良かったが、真っ白の制服が汗でじっとり濡れていたのが印象に残っている。そんなことから、後に私は、社会のため国民のために、奉仕活動をすることとなった。

実家に着いた母を迎えてくれたのは、富山市内で焼け出された、伯父、伯母などの一族であった。現在の如きIT時代ではなく、電話・電報もままならぬ時代、何の前触れもなく玄関先に立ちすくんだ私たちの家族は、顔がすすで真っ黒であった。

「きゃー、何か？　よう帰ってこらっしゃったなー、苦労をかけたなー、まあ入られま。風呂を沸かすちゃ」などと、私には理解に苦しむ富山方言の連発であった。

そこで世話になりながらしばらく滞在していて、稲刈りなどの手伝いをしていたが、私が働かなければ、一家の生活が成り立たなかった。年が改まった昭和二十一年一月に、弱冠十三歳で会社勤めをし、一家の大黒柱とならざるを得なかった。当時、女学校出が月給三十五、六円であったが、特別の計らいで月給四十円の辞令を受けた。社長は貴族院議員であったが、当時は公職追放で数社の役員をしていた。

富山県教育委員長をしていたその方の子息や上司から、学校に行くように勧められ、学費は心配するなとも言われて、私は富山県立雄峰高等学校に編入させて頂いた。現在とは異なり、衣・食・住の極めて貧しい時代、お互いに同じような境遇にあった学友らと語り合い、そして学び合ったものである。

「若いときの苦労は、買ってでもしろ」と言われるが、上京以来、半世紀以上に及ぶ今日があるのも、これら学友をはじめ、親族一同のおかげであると思っている。

現職時代には参加できなかった、樺太関係団体の諸会合をはじめ、郷友会、同窓会などに可能な

限り出席し、旧交を温めている。

六　終章

上京したのは、雄峰高校を卒業する前の昭和二十七年七月であった。病身の母を背負ってくれたお巡りさんのことや、駅前の闇市で傍若無人に振る舞っている者たちの行動などを見るにつけ、正義感止み難く、警察官になる目的で上京し、自来、自分なりに一生懸命に勤め、定年を迎えた。

その後、第二、第三の人生を過ごす傍ら、生まれ育った故郷、南樺太に関する調査、研究、啓発に渾身の努力をしている。時折、依頼されて樺太に関する講演をすると、聴衆の若者から、「カラフトとは、どんなお菓子ですか？」と、真顔で質問されることがあるが、これも戦後の教育の成さしめるところであろう。

ロシアの現憲法では、サハリン州（かつての樺太）を、ロシア連邦構成の主体領域と定めているが、国際法上は認められないことである。サンフランシスコ条約においても、ロシアは署名を拒否しており、国際法からみても、樺太がロシアに帰属する根拠はないのである。樺太が、どこの国に帰属するのか、それが国際的に決定されるまでは、我が故郷、南樺太は潜在的にまだ日本の領土であることを忘れてはならない。

二十一世紀も早や二年目、半世紀以上に及ぶ戦争のない平和な日本となり、誠に喜ばしい限りである。しかし、その一見平和な日本ではあるが、日本海でのロシア船沈没による重油汚染、北朝鮮の工作船の跳躍、テポドンの恐怖等々、平和と危機の裏表で、いつどんな事態が起きてもおかしくない情勢である。

終戦時の南樺太には、約四十万人の日本人、朝鮮人が、内地のような不自由な生活をすることなく暮らしていた。よく戦後史で「朝鮮人の強制労働」と言われるが、それは約四千人ぐらいの人によるものであった。日ソ不可侵条約を一方的に破棄して宣戦布告をし、満州・樺太に侵入し、しかも八月十五日の終戦にもかかわらず、この南樺太

の侵略を続けたソ連軍、その果てに、八月二十日には真岡市街の八割を焼き尽くし、六百人以上の犠牲者を出した。「氷雪の門」に代表される悲劇、太平炭鉱病院の医師・看護婦の集団自決などなど、涙を禁じ得ない惨事が起きた。それに追い打ちをかけるが如く、八月二十六日の留萌沖での三船遭難事件。すべて樺太の悲惨な事実である。

この稿を終えるにあたり、離別後の父と、兄のことを簡単に記すこととする。

大泊で慌ただしく別れた父と、一緒に残った兄は、あれからソ連軍によって抑留され、慣れない重労働を強いられた後、やっと引き揚げることができたものの、父は函館上陸時には仮死状態となっていて、戸板に乗せられて、そのまま緊急入院させられた。長期間にわたる療養生活の末、やっとの思いで母に連れられて富山に帰って来たが、市街の状況を見た父は、そのひどさに声も出なかった。そして再び立ち直ることもなく他界してしまった。

最近の某新聞のコラム欄に、次のようなことが書いてあった。「八月十五日が近づくと反戦・平和を声高に叫び、自分だけが平和の使徒であるかのように言っている人たちがいる。もちろん反戦・平和は声なき一般市民の大多数の望むところである。しかし、真の戦争による悲惨さなどは、正直に言って自ら体験する以外には、感得できないと思う。そう思うからには、わずかではあるかもしれないが、我々、真の戦争体験者は、もっともっと自らの体験をもとに、平和の尊さ、有り難さを現代の人に伝え、さらには一刻も早い永遠の世界平和の実現について、積極的に意見を言わねばならないと思っている」という意味のことが述べられていた。

まったくその通りで、この一節で私の結びの言葉として言いたいことが、全部言われているように感じた。